緊急提言

私立中入試への英語の導入について

—英語の4技能を平等に評価を—

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：私立中入試への英語の導入について緊急提言があるようですね。

A：(林明夫：以下省略)はい。その通りです。新聞報道によれば、首都圏の32の私立中学校で今年2月の入学試験で英語が出題されるそうです。

学校で英語が小学校3年生から正式の科目として教えられることを受けての処置だとは思いますが、そうであるならば是非お考え頂きたいことがありますので、「緊急提言」をさせていただきます。

Q：「緊急提言」したい内容とは何ですか。

A：(1)よく知られている通り、英語には4つの技能、つまり、読む(Reading)、聞く(Listening)、話す(Speaking)、書く(Writing)があります。

(2)私立中学校でこれから英語の入学試験をスタートなさるのなら、この4つの技能を同等の配点で評価する試験を行って頂きたいということです。

私立中学校で英語の入学試験の作問を担当なさる先生は、中学校や高校の英語の先生だと思われるので、是非お願いしたいのは、現在の中学校や高校で行われている「読み」と「聞き取り」中心の私立中入試は行わないで頂きたいということです。

(3)大学入試の英語が、「読み」と「聞き取り」中心から「話す」と「書く」も同一の配点に変わる理由をもう一度思い返して頂きたい。いくら読めても、ある程度聞き取れても、「話すこと」と「書くこと」が自由にできなければ、英語によるコミュニケーションは困難であるからです。この反省に立って、大学入試の英語を「4技能同一配点」のものに変えようとしています。

(4)その意味で、2014年度からスタートした上智大学の入試改革は時代を先取りした素晴らしい内容と高く評価します。

Q：林さんの提言は、私立中入試で英語を導入するのなら英語の4技能を同一配点で評価すべきだということですか。

A：その通りです。

(1)私は、小学生から英語を学ぶことには大賛成です。小学生から英語に慣れ親しんで英語の4技能を万遍なく身に着け、英語によるコミュニケーション能力を身に着けることに大賛成です。

(2)但し、私立中入試に従来の高校入試や大学入試のような「読むこと」と「聞くこと」中心の内容が出題されることになるとどうなるか。私立中学校受験生は「読むこと」と「聞くこと」を英語学習の中心に置き、「話すこと」と「書くこと」を怠ることになります。

- (3)膨大なエネルギーと学習時間を用いて私立中入試の英語の受験対策をしても、結果的には英語のコミュニケーション能力が身に着かないこととなります。
- (4)英語を出題するのであれば、同じ過ちを繰り返さないで頂きたい。英語の 4 技能を万遍なく同一配点で評価できる作問をお願いしたい。そう提言いたします。

Q：各私立中学校では、どのような取り組みをしたらよいとお考えですか。

- A：(1)大半の私立中学校には、同じ学校法人の中に幼稚園、小学校、高校、大学、大学院、専門学校、イクステンション(大学開放講座)があると思いますので、学校法人内のすべての学校の学校長と英語科のリーダーを理事長が集め、理事長直轄の「学校法人〇〇、英語教育推進プロジェクト会議」を発足することを提言いたします。
- (2)幼児教育から小学校、中学校、高校、大学、大学院、専門学校、イクステンション講座まで同じ学校法人の中では、一貫した英語教育のコース・カリキュラムを設計することを提言いたします。それでこそ、私立学校と言えます。
- (3)この中で英語の 4 技能を 6 つのレベルに分け、各々のレベルごとに求められる英語の能力を Can Do(キャン・ドゥ)「～することができる」の形で具体的に示すことが大切です。
- (4)これを具体的に示した「ヨーロッパ言語学習共通参照枠組み」も、日本の英語の先生方の中で随分広まってきました。「実用英語検定」(英検)協会も熱心に取り組んでいますので、是非、御研究ください。
- (5)自らの学校法人を挙げての「英語教育推進プロジェクトチーム」の発足が無理なら、当面は中学校や中高一貫校の中でだけでも、学校の存立を懸けて学校長直轄の 4 技能中心の英語教育の実現に向けた調査、研究をお進めになり、その一環として私立中入試の作問もお考えください。
- (6)可能であれば、学校独自の「Can Do リスト」の作成や「教材開発」、「教授法開発」にも取り組み、英語の入試導入に進んで頂きたく強く希望いたします。

Q：そのようなことを行っている学校が実際にあるのですか。

- A：(1)足利市教育委員会では、当時の足利市長の強い要請の下に「足利市英語教育推進プロジェクト会議」を発足。現在、政府の英語教育有識者会議の座長を務める上智大学の吉田研作先生を座長としてお招きし、また、当時の群馬国際アカデミー中高部校長の小笠敬三先生を副座長としてお招きして、1年間にわたって足利市の英語教育の基本方針や Can Do リストの作成、独自教材の作成、英語教員の資質向上、ALT とのコラボレーションの具体的な方法、英語教育の小・中の連携などについて、毎月 1 回、ほぼ 1 年間にわたって議論。提言書を策定し、教育委員会に提出いたしました。私も委員の一人として、ここぞとばかりにかなり積極的に活動させて頂きましたので、その内容を熟知しています。
- (2)足利市教育委員会は提言内容を真摯に受け止めて、着実に実行に移しています。吉田研作先生の年数回の御指導の下、今や、足利市の公立小学校と公立中学校では、大半のクラスで英語の授業は英語で行われるに至りました。足利市独自の Can Do リストの作成と、それに基づいた教材づくりも着々と進んでいるようです。

Q：具体的な教材を何か教えてください。

A：昨年 10 月から本年 3 月まで放送の NHK ラジオ「スペイン語講座」（月～木）が Can Do リストに基づいて行われている日本のテキストの中で最も優れた番組教材だと考えます。1 課から 96 課まで、毎回の放送ごとに「～することができる」という形でテキストが構成されています。各課のテキスト本文も、練習問題も、これ以上ないという出来上がりで書かれています。是非、御一読を。

Q：学習塾、予備校、私立学校の経営者や経営幹部の先生方にお伝えしたいことは何ですか。

A：(1) 私立中入試に英語を導入するということは、受験生全員に英語の学習を行わせることを意味します。英検準 2 級、3 級レベルの出題であれば、受験する小学生に英検準 2 級、3 級取得のための学習を行わせることを意味します。

(2) そうであるならば、受験生になぜそのような試験を行うのか、なぜ英検準 2 級、3 級レベルを例示するのかの丁寧な説明を行うべきだと考えます。もし、同じ学校法人内に小学部があるのなら、英検準 2 級、3 級に合格できるだけの英語教育も行うべきであります。

(3) 学習塾でも、単に英検合格だけではなく、英語の 4 技能をバランスよく身に付けさせるコース・カリキュラムや指導方法を少しずつでも開発すべきと考えます。

中学校入試に対応する大半の英語教育は学習塾で担当すると思われまので、責任重大です。英語の先生のスキルアップが最大の課題となります。英語の授業は英語でできるだけ行う必要があります。

Q：最後に一言どうぞ。

A：今月も 3 冊の本を御紹介いたします。

(1) 中村天風先生述著「成功の実現」日本経営合理化協会出版局 1988 年 9 月 9 日刊

(2) 梶田叡一先生著「自己を育てる一真の主体性の確立」金子書房 1996 年 5 月 30 日刊

(3) 森田健司先生著「石門心学と近代—思想史学からの近接—」八千代出版 2012 年 12 月 11 日刊

* (1) は日本にヨガを紹介した中村天風先生の代表作、(2) は「学力とは主体的に学ぶ力」という学力観を提唱された梶田先生の著作、(3) は江戸時代に市井の立場から商人道を説いた石田梅岩先生の人と思想を述べたものです。是非、御一読ください。